
毎日三枚小説『眺める彼女』

藍田いずる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

毎日三枚小説『眺める彼女』

【Nコード】

N4213D

【作者名】

藍田いずる

【あらすじ】

夕暮れのメリーゴーランドはあたかも大きな舞台のようにギシギシ音を立てながら回転していた。僕の彼女は自分より年上で、彼女はまるで観客のようにそのメリーゴーランドを眺めている。彼女はその中に何を求めているのだろうか？

電飾の優美さとは対照的に、齒車の音が耳に残った。鉄の扉を開くような重たい音。子供たちの嬌声が響いて、夕暮れの遊園地を作っている。僕を含めたぎこちないカップルも、忙しそうに行ったり来たりする家族連れも、豪華絢爛な回転木馬の前では観客でしかなかった。眩しい回転木馬だった。子供が神様をお願いをするような微笑みで、彼女はメリーゴーランドを見つめていた。風に揺れ、長い巻き髪の間にかくれんぼしている耳が現れて、僕はなぜか恥ずかしくなる。手すりに肘を付いて、彼女は何か考える素振りをしていた。

「もうそろそろどこか行かない？　まだパレードは始まらないよ。その間に食事でもすまそうよ」

言葉は返って来なかった。彼女はメリーゴーランドを走馬灯に見立てているのかも知れない。二十一年の走馬燈。でも僕にはそれを聞く勇氣はなかった。自分たちの関係が揺らぐのが怖いのだ。僕に今出来る事があるとすれば、今日の夕食は何が食べたいか聞いたり、彼女の横顔を眺めたり、何か飲み物でも買ってくる位の事だ。本当なら何か気の利いた言葉が言えればいいと思う。

「ねえ、ねえ」

目を細めて彼女は言った。

「なぜ、同じ所ばかり廻っているだけなのに、子供たちは楽しそうにしているんだと思う？」

突然の質問に僕はたじろいだ。彼女の質問に答えようと僕は考える。子供が何故あんな乗り物を楽しいと思うのか、僕には想像出来そうに無かった。でも自分だって子供の時は楽しかったのだろうかと思う。

メリー　ゴー　アラウンド

言葉が反響し続けた。ふと思いついた言葉が馬鹿らしくて笑って

しまった。「羊」

「どうしたの？」

「メリーって羊の事だろ？ 何で馬が回ってるのかなって思ってた。彼女は考えていた。彼女の考える癖は鼻の頭を指で掻くことだった。しばらくしてから彼女は言った。

「夢みたいなさって意味じゃないかと思うな？」

自信満々な彼女の顔に、苦笑いして頭を掻いた。

「何か飲み物でも買ってくるよ。喉渴いたでしょ？」

そう言っ僕は逃げ出した。彼女は何を考えているのだろうか……。僕は彼女の過去に嫉妬する。それは良く心の傷とか言うけど、僕は呪いに近いものだと思う。彼女にかけられた呪いはまだ僕の力で解けそうになかった。

少し歩くと木で出来たロジがあった。プールサイドにありそうなアルミ製の丸テーブルがあまり良い印象ではなかった。多くの人が席に座り、そこからメリーゴーランドを見ている。カキ氷やフライドポテトの写真パネルが店の奥に張ってあった。細長い顔をした女店員が忙しそうに手を動かしている。僕は列に並んで注文をするのを待った。時間をもてあまして辺りを見回すと、デパートの上にあるようなおもちゃのゴーカートで、子供二人が遊んでいた。短いカリアゲで同じ黄色い服を着ていて双子だろうと思った。

「いらっしゃいませ」と言われて振り返る。いつのまにか列は無くなっていた。

「アイスコーヒーとアイスティー一つ」

慌てて注文を言う。子供の泣き声が聞こえてくる。僕はまた振り返る。双子が喧嘩している。そりゃ喧嘩くらいあるだろう。

「サイズSとMとLがありますが、いかがいたしますか？」

それでも僕は喧嘩になるだけでした。と思しながら「両方ともMで…」と答えた。成長すれば本気で言い合う事すら負担になる。辺りにいた人たちは皆一方向に向かっていった。パレードが始まるのだろう。子供たちはぬいぐるみから降りて、ロジのテーブルに向か

っていた。迎え入れるように立ち上がる老婆。ジュースが用意できているのに気づいて受け取った。すると突然店員が言った。

「すみません。あそこのお客様さんにこれ出して貰えませんか？」

「え……」と僕は思わず言った。

「頼まれてるんだけど、私はここから離れられないの。お願いよ」
事情が飲み込めず僕は生返事した。

「ありがとう。良かったらこれ」

僕のジュースのトレイに乗せられたオニオンポテト。軽く会釈して僕は二つのトレイを持った。トレイの上にはポテトとジュース。二人の孫のために買った物なのだろう。近づいて行くと彼女が何故僕にそんなことを頼んだのか判った。テーブルの隣に立てかけられた杖。老婆は足が悪いのだ。

「おばあちゃん。これ、頼んだんでしよう？」

銀色のパイプ椅子に座った老人にそう言うと、老人は驚く様子もなく僕を営めるように眺め、ゆっくりとした口調で感謝した。

「いえ、別に……」と言う前に、何事も無かったかのように「ポテト届いたよ」と大声で孫を呼んでいた。まあいいかと僕は売店のテラスから出て行った。彼女と一緒にいた場所に戻ってみても、彼女の姿勢はそのままだった。

「飲み物買って来たよ。ここだけは少子化とは関係ないらしいね……」

彼女は振り返りありがとうと言って飲み物を取った。

「オニポテじゃん！ 買ってきてくれたの？」

彼女はオニポテに興味津々だった。どう説明したら良いかと僕は言葉が出なかった。

「そこ座ろうよ」

彼女の指さした先には昔からあるような古びたベンチがあった。言うとおりにベンチに座る。

「ごめんね。心配した？」

そう言って僕の隣に座った。

「あんな子供たちでも一年や二年したらジェットコースターやコーヒークップに乗るようになるんだろうね」

彼女はオニオンフライを口にほおぼる。

「私たちもみんなそうなのかなあ……どんなカップルだって、ほとんど同じように同じところをくるくる回って楽しんでいるだけなんだよね」

「さあどうだろうね」

その通りかも知れないけど、今はそうでもない気がした。

「時々祐子が大人なのか子供なのかわからなくなるよ」

「そう？」

「パレードが始まるみたいだよ。行こうよ」

僕は立ち上がり彼女を促した。渋々彼女は僕の手を取り、僕らはベンチから立ち去った。

二人で歩きながら、これもまた、メリーゴーランドの一場面であればいいなと思った。

（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございます。

今回は短編小説なんでこれでおしまいです。これからもう少し長い作品を書けるように努力したいと思います。まだ小説も少数ですが、どんどん増やしていくつもりです。まだ読みにくい所や解りづらい所もあったと思いますが、最後まで読んで頂き本当に感謝です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4213d/>

毎日三枚小説『眺める彼女』

2010年10月8日15時33分発行